

社会福祉法人 とともに福祉会

札幌市西区発寒14条14丁目2-33

担当者:菅原 美枝さん、石川 則子さん

外部講師:臼井 千晶さん

「アート活動の概要」

毎週木曜日の午後に15名程の参加者が創作活動を行っており、月に一度は作家の臼井千晶さんが指導に来ています。

創作活動を始めたきっかけは、ともに福祉会の前身「小規模作業所ともに」ができたころ、通常の軽作業は体をを使う仕事だったそうです。しかし、そのような活動が困難な利用者たちもあり、座ってやれる様な作業を模索している中、障がいのある方のアート活動を支援する講習会にスタッフが参加したことがきっかけとなり、軽作業の代わりにアート活動を取り入れたそうです。

創作活動の時間は作者自身が決め、モチーフもそれぞれが選んでいるそうです。1枚の作品に1年近く要する方もいれば、1回に何十点も描く人がいるそうです。



机を向き合わせて楽しい雰囲気創作風景 植物等の実物のモチーフが置かれている



創作活動を指導する臼井先生

「作品を商品に」

ここ数年、作品展の開催や作品をカレンダーやエコバックなどの商品にして販売するという試みをしています。これは作品をたくさんの方に見ていただきたい、創作活動から生まれた作品を利用者さんの工賃にも反映させていきたいという思いから始まったそうです。

作品をカレンダーなどにするという事は、思わぬ反応も生んだと言います。というのも、以前は半分以上の利用者が立体の造形物を好んで作成していましたが、平面作品の方が、カレンダーなどの商品となりやすいために、平面作品を好んで創作するようになったそうです。

ともにでは、レストランの壁や、イラストとして作品を使用したいという依頼があるそうです。



作家によって表現内容や画材も異なっている 施設内の至る所に完成された作品が飾られてる

「展覧会の開催」

作品展の開催では、グッズの販売の手伝いなどで、作者本人が会場に居られる様にしています。鑑賞者の反応を創作の励みにしてもらいたいとの配慮からだそうです。

「アート活動で感じる事」

「利用者さんが描いた作品を見ていると、その時、その瞬間のその方ご自身が垣間見られる気がします。言葉とは別のところで、自分を感じたり、いらぬものを手放したりすることをしているようにも見えます。結果、精神の安定にもつながっているのかもしれない。」

「特別大きな目標を掲げて行ってきた活動ではないので、少し動くと課題が見え、また少し動くと次の課題が見えてくる・・・そんなことの繰り返しです。」と、担当者の菅原さんは言います。

また、外部講師の臼井千晶さんは「精神状態によって作品に差が出ているように見えます。悩んでいると緻密な作品になり、安定すると特徴の無いっぽいとした作品になったりします。

『また、作品展にかざろうね!』と声をかけるといつも以上に頑張ったりすることも見られます。

創作活動や作品展を開く事でやりがいを与える事も出来ると感じています。」と言います。



利用者の作品のポストカードや絵を柄にしたトートバッグや緑茶消臭袋



2010年度のカレンダー 毎月1点ずつ利用者の作品を大きく掲載

2010年9月に開催された「ともにアート展」の展示風景 奥ではカレンダー等のグッズも販売
左)坂本さんの作品
右)中谷さんの作品



社会福祉法人草の実会（リトルローズ）

札幌市中央区南13条西7丁目2-3ほか

担当者：手塚 玄さん

「アート活動の概要」

社会福祉法人草の実会のなかで「草の実平岸の里」では週に1度、外部の講師が来てアート活動をリハビリの一環として行なっています。また「リトルローズ」では和服地リサイクル、さき織り、さをり織りをしています。「草の実工房もく」では、札幌の円山動物園オリジナルグッズの他、各種木工製品を製作しています。

もともと、草の実会を設立した職員は、入所施設で働いていましたが、入所施設のあり方に疑問を感じて独立し、障害者も健常者も共に働く「草の共働サービス」を始め、木工や廃品や便利屋等を行なっていたそうです。その後、徐々に行き場の無い障がい者や働く事の困難な重度の障がい者も増えてきましたので、働くだけでなく、どのような人にも日中に活動する場の必要性を感じ、1999年に社会福祉法人の設立に至った経過があります。

法人としては業務でアート活動を行っている訳ではないようで、基本的に利用者のやりたい事をバックアップする事として取り組んでいるそうです。



リトルローズに併設する店舗では製品の他、畑中さんのポストカード等、他の作業所で制作された色々な製品も販売しています



リトルローズで和服をリサイクルして製作したシュシュを紹介する担当者の手塚さん

「やりたい人がやる」

10年程前から札幌の施設協会のアート展に展示しているそうです。当初は、それに向けての作品づくりも支援していたそうですが、現在は希望者が個人的に出展しており、草の実会ではその手続きのみの手伝いとなったそうです。

草の実会では独自にアート展を開いたこともありましたが、アート展に関する事柄を全て施設がコーディネートして開催するのはおかしいと感じ、関係者も利用者も「やりたい人がやる」というスタンスになったと言います。

昨年までは、土曜日の余暇的な活動で絵画サークルを行っていましたが、この場合も、講師を含め職員は技法や色遣いの指導はせずに、基本的に好きに描いてもらうことに心がけたそうです。

現在は草の実会の地域活動支援センター「あぐら」でアートの日として同じようなスタンスで実施しています。

「二人のアール・ブリュット」

草の実会からは、パリ市立アル・サン・ピエール美術館で開催中の「アール・ブリュット・ジャポネ展」に西本さんと畑中さんの二人が出展されています。西本さんは現在“草の実工房もく”に所属し、木工作業員として働いており、ボール盤や糸ノコ等の一般的な木工器具を使用して作業しています。勤務中は自分のアート活動は行わずに、作業で余った木材を休み時間や土曜に加工したり自宅に持ち帰って作業しています。

※詳しくは別紙「北海道のアウトサイダー・アート」をご覧ください。

西本さんはフランスにて展示されている事で特にモチベーションが上がっているようには見えませんが、嬉しそうな様子は感じると手塚さんは言います。



糸のご盤を使用して、製品の一部をつくる西本さん



“草の実工房もく”では他にも仕上げ等の軽作業を行っています

一方、畑中さんは“草の実平岸の里”で通常は軽作業を行なっており、休憩時間や休日に創作活動を行っていました。以前はクレヨンを強く塗り込める様に動物や相撲、ランプや数字等、その時に感心のある様々なモチーフを何枚も描いています。※詳しくは別紙「北海道のアウトサイダー・アート」をご覧ください。

現在、畑中さんは殆ど絵を描く事はありませんが、自身が事件だと感じる事が有ると、絵を描くことも希にあるそうです。

手塚さんは、西本さんや畑中さんの作品を販売する事は考えてないそうです。その事が本人にとってプラスになるのかマイナスになるのか現時点では何とも言いがたいからだそうです。



作業の休憩時間にキーボードで音を楽しんでいる畑中さん



重度の障がい者が外部講師指導のもとリハビリとして描かれた作品（草の実平岸の里）

社会福祉法人剣渕北斗会 知的障害者更生施設 剣渕西原学園

北海道上川郡剣淵町西原町3084
担当者:平川 覚さん

「活動の概要」

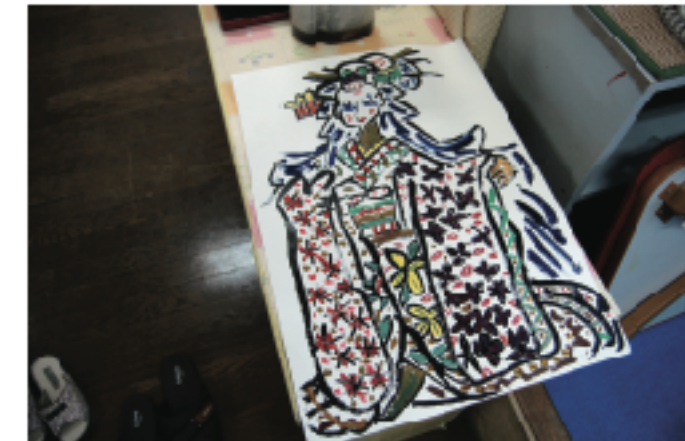
西原学園では47名程の利用者が月曜日から金曜日まで、アート活動を含む様々な活動を行なっています。6年前までは陶芸・木工・手芸・園芸の製品生産を中心に日中の活動を行っていたそうですが、利用者の高齢化や障がいの重度化などを考慮して、生産重視ではなく、日々の生活を充実するものとしたプログラムに変えたとのこと。このプログラムの中でアート活動は、余暇活動として位置づけているとの事です。

「自由な表現を尊重」

アート活動で職員は「この様な物を作る」、「これを描く」などの具体的な指示をせずに、本人の自由な表現を尊重しているとの事です。平川さんは、自由な創造から出来た作品こそが、彼ら自身を表現した『かたち』になっていると考えています。作品の評価に関しては、作品を展示する際に作者に作品のそばに居てもらい、鑑賞者の反応を直に感じてもらうそうです。また、展覧会では交流会なども開き、作者を作家として施設から外に出向く機会を増やしています。施設の関係者以外の人とのコミュニケーションは作者の創作意欲や日々の生活の活力にも良い影響を与えているそうです。また、このようなコミュニケーションによって逆に、鑑賞者側も作品を通じた交流によって、作家に関心を持つ効果があると言います。



上)こちらのグループはアート活動を主にしています 大変和やかな雰囲気です
下)隣の部屋のグループでは“さori織り”等も行っています



「新しい試み」

平川さんは、自身を含め西原学園の職員は福祉専門の職員ですので、アートに関しての知識に乏しく、画材の種類や使い方を知らないで作品の幅を広げるアドバイスが出来ない事を危惧しているそうです。そのため、他の団体や関係者と協力して職員の育成と、より円滑で効率的な作品展示を行うことを目的とした「上川圏域アートネットワーク ウエカルパ」を設立しています。

※詳しくは上川圏域アートネットワーク ウエカルパの項目にて。

今後は、このネットワークを利用して、西原学園のスタッフの美的感覚を養い、可能性のある作品や作家たちを埋没させない様にしていきたいと考えているようです。



壁面に過去の似顔絵やTシャツ等の多様な作業で製作された作品が飾られています ガラス付の額や色画用紙等で丁寧に額装されています

社会福祉法人 当麻かたるべの森 かたるべの森美術館

上川郡当麻町伊香牛2区(旧伊香牛小学校)

担当者:石黒 康太郎さん

アドバイザー2名

「活動の概要」

毎週火曜日に25～26名の方が、かたるべの森美術館のアトリエでアート活動を行なっています。無認可の作業所の頃から少しずつアート活動を行い、ギャラリーを設立した10年ほど前から毎週1回定期的に行うようになったようです。

当初から、法人の副理事長が障がいを持つ人たちのアート活動に対して積極的に取り組んでいたため、かたるべでは「地域や社会とアートを通じて繋がる」というコンセプトを「アクセスアート」として、活動を展開していることです。

現在、アート活動の指導には、芸術大学を卒業している菊池さんが職員として関わっています。自己表現の可能性や行動の選択のアドバイスを中心に菊池さんは指導しているようです。



「北海道のアウトサイダー・アート展」(旭川美術館2009年開催)に出品した吉田さんの新作

「かたるべの森美術館がオープン」

2010年5月に、かたるべの森美術館がオープンし、現在はここを拠点にアート活動を行っています。専用の表現のスペースを設けた事で、ボランティアスタッフの協も受けやすく、新たな表現レベルの作品が可能になったようです。



作業風景全景

「職員の配慮」

職員は作品に対してのクオリティーや技術的な指導はしないが、人に見てもらふ事を前提とし、より適切な画材の選択等を行なうことはあるそうです。基本的に展示や企画展等への出展を考慮したものではなく、完成度の高い展示を目指すために、自由に自分の表現を画材にぶつけてもらえるような配慮からだそうです。

具体的に展覧会を予定している場合も、展覧会に向けて作品を描いてもらうだけではなく、展覧会のコンセプトやその時の作家1人1人の表現を大切にしながら作品を出展しているそうです。

いずれにしても、画材の提供や本人の表現の幅が広がるようなアドバイスはしても、単純に作品のクオリティー——を上げるためのアドバイスや本人の表現に反するようなアドバイスは行わない様に気をつけているそうです。

「環境づくり」

何らかのきっかけで、ある日、急に積極的に描き始めたり、自分で本を持ってきて描くようになったりする事があるので、そのように絵を描くきっかけを与えられる様な環境づくりも大事と言います。

ただ、アート活動の参加者が大人数だという悩みもあるようで、今後は1人1人に合った創作の環境を改善していきたいと考えているようです。

「アート活動で感じる事」

アート活動が参加者の人生を豊かにしていると感じる事もあるようです。

例えば、休日に作者の親が美術館に展示している作品を見に来ると、元気に自分の作品をアピールする姿がみられるそうです。また、他の展示や作品を見てライバル視して意欲的にもなるそうです。

展示や外部からの評価というより、作者によっては純粹に、絵の具の感触を快感として楽しんでいるケースもあるようです。

「作家の紹介について」

かたるべの森美術館にて展示されている作品は、キャプション等の説明書が有る物と、無い物があります。作品が完成する過程が解った上で、作品としての価値が現れる場合もあるので、作品の説明書きが必要なケースもあるようですが、例えば「この作者は、このような障がいがあるためにこのような作品になる」のような、障がい者が描いた作品である事を前提とした紹介の仕方は避けたいと考えているからだそうです。

ただ、かたるべの森美術館のコンセプトやオープンまでの経緯を知っている方の中には、障がいのある人のアート作品を展示している美術館として来館している方も多くいるようで、「この作品はどのような障がいのある人が描いているのか」と知りたがる人はいるようです。



「かたるべ美術館の今後」

かたるべの森美術館は、障がい者のアートのみの展示と限定してはいないそうです。絵本作家や地域の人とのコラボレーション展示などいろいろな使い方を考えているとの事です。さらには、かたるべの森美術館に展示している作品や、過去に制作した作品等も地元の商店街の各店舗で飾ってもらったり、町のギャラリー等で展示してもらうなど美術館以外でも地域に根ざしたアート活動のアイディアもあるようです。

「担当者の熱意」

担当の石黒さんは、「積極的に作品を多くの人に見せたいと願う作者には、個展の開催の支援など作者のニーズには極力応えてあげたい」と意欲的です。また、石黒さんは自身の施設に限らず、他の作業所や施設とも連携をとり、発表や演出をするようなアートネットワークの活動を支える事にも尽力したいと考えています。



かたるべの森美術館は元々学校でしたので、教室を利用した展示をしています
左)壁面の棚には綺麗に並べられた陶芸作品が 上)複数枚の平面画を組み合わせた演出
下)廊下や階段、ホールにも、織物やTシャツ、絵画等の沢山の作品が展示されています